

2017年度総会議事録

日 時：2017年5月26日（金）13時30分～14時45分

場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター 大ホール（東京都渋谷区）

出席理事：岩崎俊樹，瀬上哲秀，石原幸司，榎本 剛，近藤 豊，佐藤 薫，佐藤正樹，塩谷雅人，高藪 出，竹見哲也，坪木和久，仲江川敏之，中村 尚，廣岡俊彦，藤部文昭，堀之内 武，山田和孝，余田成男，渡部雅浩，以上19名（理事現在数20名）

出席監事：鈴木 靖，高谷康太郎，以上2名

参加者数：個人会員の会場出席者132名，総会参加票による出席者1,589名，合計1,721名。（個人会員現在総数3,238名（2017年4月10日現在））

決議の要件：社員総会の決議は，総社員の議決権の3分の1以上を有する社員が出席し，出席社員の議決権の過半数をもって行う。（定款第17条）

議 事

1. 開会

山田理事より出席状況と決議の要件を満たしていることが報告され，総会の開会が宣言された。

2. 議長選出

総会議長に中村 尚会員（東京大学）を選出した。

3. 理事長挨拶

今年の春季大会は，中村 尚大会委員長はじめ，東京大学先端科学技術研究センター，東京大学大学院理学系研究科，国立極地研究所，首都大学東京による大会実行委員会の皆様の尽力により開催されている。実行委員会の皆様には，改めて心より御礼申し上げます。

会場では熱心な討議が続いている。学会に参加されている会員の皆様に，心より感謝申し上げます。気象学会をめぐる最近の動きを簡単に紹介し

たい。緊急課題は，財政問題である。ここ数年，単年度で数百万円の赤字が発生し，会員の皆様にはたいへん心配をおかけしている。運営改善のため検討部会を設置し，早急に対策を検討する。今後一層経費節減を図るとともに，出版事業などでは収支改善の努力を続ける。ただし，学会の事業を安定的に継続するためには，会費の見直しも含めて検討する必要がある。皆様には何卒ご理解を頂きたい。財政悪化の最大の要因は会員数の減少であり，10年前に比べると500人以上減少した。この傾向は現在も続いている。新入会者を増やし，退会者を減らすために，学会の魅力を増す努力をしていく。

気象集誌編集委員会では経費の節減や投稿料の値下げを念頭に，オンライン出版を検討している。また，電子情報委員会では会員情報管理の電子化により，会員向け情報サービスを強化したいと考えている。ただし，従来の仕組み・制度との整合性を図るために，いろいろハードルがあり，どちらも，今しばらく，お待ちいただきたい。

今年で3回目となる気象学会のジュニアセッションでは，全国の中学・高校から過去最高の31件の応募があり，気象に関心を持つ中高生が全国にたくさんいることが分かった。ジュニアセッションの参加者には，気象に対する興味を持ち続けて，気象学会のサポーターとなり，将来の気象学を担う若者へと育てていただくために，環境整備に努力する。

会員が直接提案する学会活動の一つに研究連絡会という制度がある。特定の課題について永続的な情報交換の場を持つために，学会がその活動をサポートする制度である。現在，メソ気象研究連絡会をはじめとして，14の研究連絡会が活動している。新しい研究の芽を育てるために，研究連絡会制度を有効に活用していただきたい。

今年、14番目の研究連絡会として、気象学史研究連絡会が設立された。気象学の発展のあり様や科学者の生き方など、歴史に対する興味は尽きない。これまでとは一味違う大変すばらしい研究連絡会ができた。私も、会員の一人として歴史から多くを学びたい。設立に尽力された関係者の皆様に敬意を表するとともに、今後の発展に期待する。

さて、今期の評議員会では、「地球観測の強化に向けて日本気象学会は何をなすべきか」というテーマで有識者の皆様にご意見をいただいた。以下ではその趣旨を紹介する。言うまでもなく新しい観測システムの導入は、気象学と気象業務の発展の大きな原動力である。これは、これからも、変わらない事実だと思う。特に、今日、地球観測をめぐる状況は大きく変わりつつある。

(1) 観測技術そのものが大きく進歩している。レーダなどのリモートセンシングや衛星観測は長足の進歩を遂げている。また、様々な観測データがリアルタイムで収集されるようになり、気象情報もいわゆるビッグデータの時代を迎えている。

(2) 観測データの統合的な利用技術が進歩している。特に、4次元データ同化技術の発展により、数値予測モデルを利用してたくさんの観測データを同化し、気象要素や大気微量成分量の2次元、3次元の格子点値が高精度で推定されるようになった。

(3) 社会的なニーズの変化も重要な因子である。2011年の東日本大震災以降、防災意識が急速高まっており、防災のための観測システムの高度化に対するニーズが高まっている。また、気候変動、地球温暖化や環境問題への関心も高く、関連する情報提供を可能とする観測システムの整備が求められている。

新しい時代の地球観測システムの構築に向けて、学会の果たすべき役割について、2年間かけて考えていきたい。いずれ、報告書を作成すると思う

が、会員の皆様もこれを機会に将来の観測システムの在り方について大いに議論していただきたい。

4. 表彰

(1) 日本気象学会賞

岩崎理事長から受賞者に賞状並びに賞金・メダルが授与された。受賞者と、受賞対象となった業績は以下の通り。

猪上 淳 (国立極地研究所)

北極の大気循環および大気-海氷-海洋相互作用の研究

渡邊真吾, 河谷芳雄 (海洋研究開発機構)

重力波解像モデルを用いた中層大気大循環の研究

(2) 藤原賞

岩崎理事長から受賞者に賞状並びに賞金・メダルが授与された。受賞者と、受賞対象となった業績は以下の通り。

大野木和敏 (気象庁)

全球大気長期再解析JRA-25およびJRA-55の推進

(3) 岸保・立平賞

岩崎理事長から受賞者に賞状並びに賞金・メダルが授与された。受賞者と、受賞対象となった業績は以下の通り。

石原正仁 (元気象庁)

リモートセンシングシステムの導入による新しい観測システムの構築と社会実装に関わる功績

明星電気(株) 高層気象グループ (代表 清水健作)

多様な高層気象観測用ゾンデと各種センサーの開発によりわが国の気象観測と学術研究を支えてきた功績

(4) 気象集誌論文賞

気象集誌編集委員会委員長の佐藤正樹理事が選定理由を説明した。受賞者と、受賞対象となった論文タイトルは以下の通り。

Wayne H. SCHUBERT, Christopher J. SLOCUM,
Richard K. TAFT:

“Forced, balanced model of tropical
cyclone intensification”

Kotaro BESSHO, Kenji DATE, Masahiro
HAYASHI, Akio IKEDA, Takahito IMAI,
Hidekazu INOUE, Yukihiro KUMAGAI,
Takuya MIYAKAWA, Hidehiko MURATA, Tomoo
OHNO, Arata OKUYAMA, Ryo OYAMA, Yukio
SASAKI, Yoshio SHIMAZU, Kazuki SHIMOJI,
Yasuhiko SUMIDA, Masuo SUZUKI, Hidetaka
TANIGUCHI, Hiroaki TSUCHIYAMA, Daisaku
UESAWA, Hironobu YOKOTA, Ryo YOSHIDA:
“An introduction to Himawari-8/9 -
Japan’s new-generation geostationary
meteorological satellites”

Yuji KITAMURA:

“Improving a turbulence scheme for the
terra incognita in a dry convective
boundary layer”

(5) SOLA論文賞

SOLA編集委員会委員長の竹見理事が選定理
由を説明した。受賞者と、受賞対象となった
論文タイトルは以下の通り。

Toru ADACHI, Kenichi KUSUNOKI, Satoru
YOSHIDA, Hanako INOUE, Ken-ichiro ARAI,
and Tomoo USHIO:

“Rapid Volumetric Growth of Misocyclone
and Vault-Like Structure in Horizontal
Shear Observed by Phased Array Weather
Radar”

5. 2017年度総会議案審議

(1) 提案説明

議案1：2016年度事業報告

山田理事から、研究会及び講演会等の開催
と普及・啓発活動、機関誌等の刊行、研究業績

の表彰、会員の異動状況、役員の選任及び解任、
会議等の開催の事業報告があった。

議案2：2016年度決算報告

石原理事から、公益法人会計基準に従った
決算報告があった。赤字額が大きかったこと
に関連して、研究ノートの発行が年度末であっ
たことなどの説明があった。

議案3：2016年度監査報告

高谷監事から、帳簿類の管理、収支、事業
執行状況と会員数の動向等に関する監査結果
が報告された。

2016年度の活動について、大会・研究会の開
催と学術誌の出版などの研究活動、ジュニア
セッションの開催や各支部における気象講演
会やサイエンスカフェの開催など、一般市民や
子供を対象とした普及活動について高い評価
を受けた。一方、会員数の減少傾向及び事業
収支において2014年度以降赤字が慢性化して
いる財政状況については、学会の在り方につい
ての再考、会費や事業の見直しの必要性が指摘
された。

(2) 質疑応答

学会運営が赤字の中、秋季大会を今年から4日
に増やすこととなったが、問題ないかとの質問が
あった。岩崎理事長から、日数の増加は学会員へ
のサービス向上を目的としたものであること、大
会運営は極力、大会参加費をもとに実施している
ことが回答された。

6. 採択

議案1, 2, 3について、採決の結果、以下
のように賛成多数で承認された。

有効総会参加票1,573票のうち、理事会案賛成
442票、議案別意思表示57票、議長委任1,072票及
び個人会員委任2票で、議長委任票及び個人会員
委任票は全て理事会案に賛成であった。また、会
場に出席した個人会員132名は全て理事会案に賛
成であった。

議案1 : 賛成 1,696, 反対 3, 保留 6

議案2 : 賛成 1,696, 反対 3, 保留 6

議案3 : 賛成 1,697, 反対 3, 保留 5

7. 2016年度総会報告事項

(1) 内容説明

報告1 : 2017年度事業計画

山田理事から、従来の事業を継続して実施することに加えて、気象研究ノートの会員向け公開の準備を進めること、国際学術交流事業ではACMへの参加費援助を重点的に行うこと、財政・支部体制・会員制度等について引き続き検討を行うことが説明された。

報告2 : 2017年度収支予算

石原理事から、公益法人会計基準及び2015年度の実績に従って予算を組んだこと、受取会費を公益目的事業会計と法人会計に2016年度と同じ割合で配分したことなどの説明があった。

報告3 : 2015年度決算報告（正味財産増減計算書）の修正

石原理事から、2015年度の決算報告について、2014年度に受け入れた寄付金の扱いを内閣府からの指摘に従い、一般正味財産の経常外経費「過年度修正損」に計上した上で指定正味財産の「過年度受取寄付金」に計上するよう修正したことが説明された。

(2) 質疑応答

収益、刊行事業で大きな赤字が出ていることについて、また、監査でも赤字について意見が出ていることについて、今後の計画について意見を伺いたいとの質問があった。これについて、瀬上副理事長から、企画調整委員会の下に設置したワーキンググループで事業の見直し並びに会費に関する検討を行う予定であることが回答された。

8. 議事録署名人の指名

議事録署名人に佐藤 薫会員（東京大学）と森正人会員（東京大学）を指名したところ、異議なく承認された。

9. 議長解任

中村議長により、総会の議事運営に関する出席者の協力に感謝する旨の挨拶があり、議長は解任された。

10. 閉会

山田理事により総会の閉会が宣言された。

以上の議事録の通り相違ありません。

平成29年 6月 28日

総会議長 中 村 尚 印

出席者代表 佐 藤 薫 印

出席者代表 森 正 人 印